

奈良・平城宮跡

- 1 所在地 奈良市佐紀町・法華寺町・北新町
- 2 調査期間 東院地区 一九七八年(昭和53)六月～十一月
第一次朝堂院地区 同年四月～七月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 狩野 久
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
平城宮跡内では一九七八年度において二調査地区から木簡が出土している。

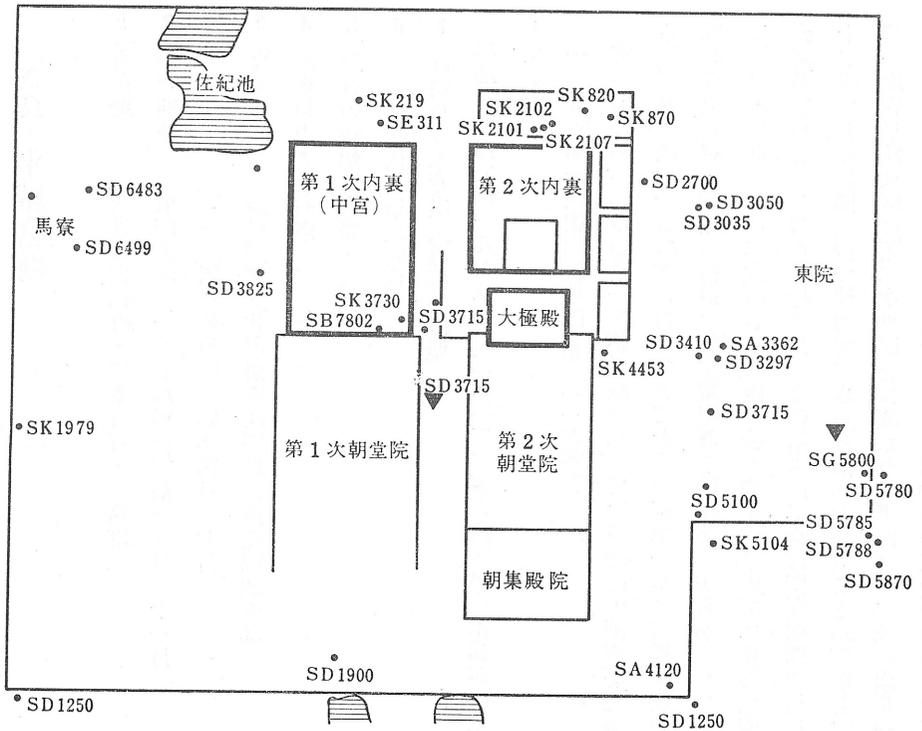
一 推定第一次朝堂院地区(第一一二次調査)

宮中央部のいわゆる第一次朝堂院と称している地区の調査を北から順に九七次、一〇二次と行ってきており、東第一堂の規模や朝堂院の東限の塀・築地の構造、朝堂院東部の状況等が明らかになっている。本年度も一〇二次のさらに南に続く個所で、東第二堂の規模確認を中心とした調査を行った。その結果第二堂は梁間四間、桁行十二間以上の規模を持つ建物で、さらに南へのびることが判明し、第一次朝堂院地区は第二次地区とは異なり、東西に各二棟の南北棟が配置される可能性が強くなった。また朝堂院の東面の区画は、塀

↓塀↓築地と三度の造替がある。この朝堂院東限から約一七m東の第一次朝堂院と第二次朝堂院の間に平城宮中央部の基幹排水路である南北溝がある。この溝から木簡が出土した。九七次、一〇二次調査においても同溝の上流からそれぞれ一六三点、二八 points の木簡が出土している。ただしこの溝には両朝堂院地区からの東西溝が流入している。どちらの地区の木簡か決定することはできない。溝は素掘りで、幅は二～三m、深さ一mあり、三八m分を検出した。二回の改修が認められ、上・中・下の三層に分かれる。中・下層についてはそれぞれさらに二層の堆積がある。過去二回の調査の木簡の出土状況から、最初の改修は天平初年頃、二回目は平安時代に入ってからと考えられる。木簡は溝北部に集中して二四点出土した。内訳は上層溝下層八点、下層溝上層一四点、下層溝下層二点である。削屑は七点ある。この溝以外では発掘区東北隅の土壙から一点出土しているが、わずかに墨痕があるだけである。

二 東院園池北方地区(第一一〇次調査)

平城宮東張出部の東院地区東南隅に新旧二時期の認められる園池遺構のあることが既に明らかになっている(四四次・九九次調査、本調査区はその池の北側に接する場所である。今回調査の結果、三回の整地と、A期以前およびA～G期の八期に区分できる重複の著しい遺構が検出された。各期の絶対年代は決めにくい、今のところ、A期以前とはこの地区の本格的造営開始以前の和銅年間頃、A期は東院東面大垣造営時、B期は旧池が作られる養老年間以前、E



第1図 平城宮木簡出土地点図 (1979年3月現在) (▼ 今年の木簡出土地)

期は新池が造成される天平勝宝年間以降と考えている。主な遺構は掘立柱建物一二棟、礎石建物四棟、掘立柱塀五条、溝一九条、石敷道路三条、土壙などである。性格的には発掘区南半は園池との関連地域とみてよさそうであるが、北半は園池と別個の地域となる時期もある。木簡は総点数六六六点、うち削屑は三八八点である。これらの木簡のうち二八八点はA期以前の土壙・溝から、一九九点はD期の溝から、他は整地土、柱穴掘形等から散在的に出土した。

8 木簡の积文・内容

一 推定第一次朝堂院地区

下層溝下層

(1) 大伴

□□□□日下部□□□× (144)×8×3 019

下層溝上層

(2) 「□進上女瓦三百□□丁卅五人

「□神龜五年十月□□□秦小酒□麻呂」 (105+105)×(25)×5 081

(3) 「遠江国敷智郡□呼嶋

「十斗七首銀券□十六□□
十七斗銀券□二卅五□□
〔付カ〕

(表裏異筆)

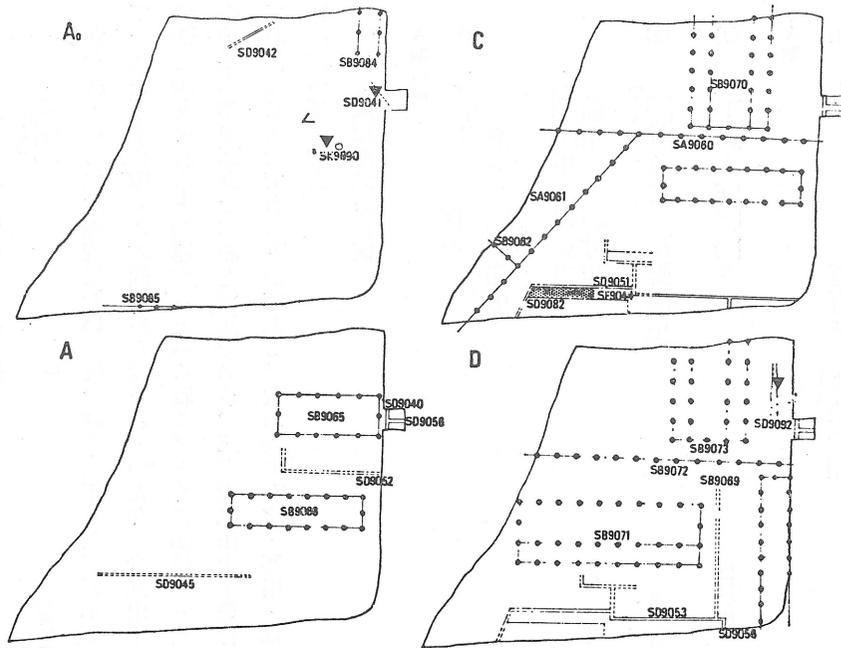
(183)×39×5 081

上層溝下層

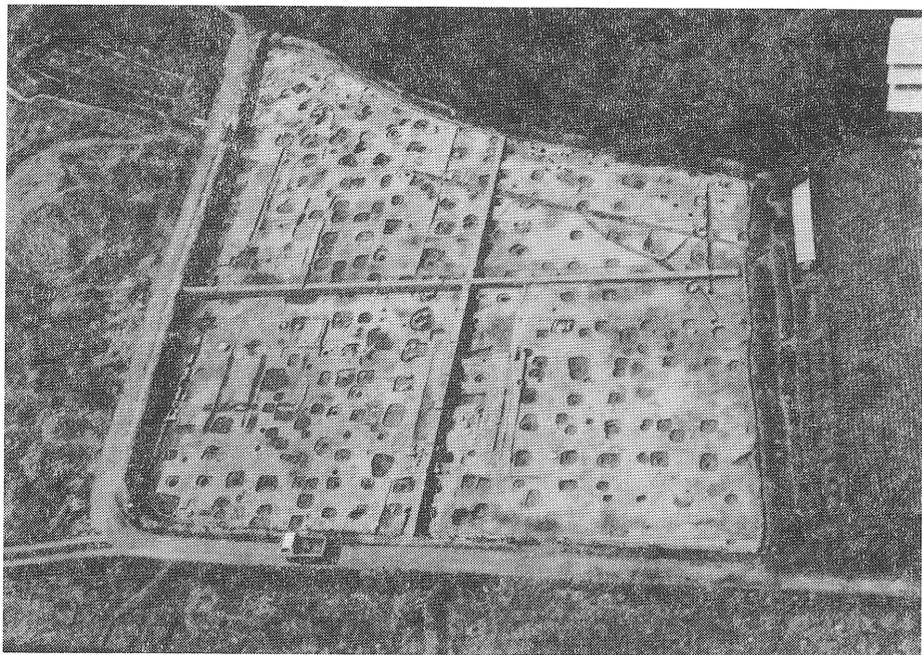
(4) 當 □匠丁十二×

(107)×22×4 081

(5) 籠作鵜甘第□□□□□□× (裏に墨痕あり) (212)×(35)×5 019



第2図 東院園池北方区時期別遺構図



第3図 東院園池北方遺構（全景）

